

ミニトマト

特徴

ミニトマトは、完熟で収穫するため、トマト本来の味が得られること、高糖度、ファッション性等から、市場入荷量は1980年代には大きく伸びたが、1990年以降の変化は小さい。土質は特に選ばないが、普通トマトと同様に過湿には弱い。また、土壌水分を急激に変化させないことが大切なので、排水が良く、こまめなかん水ができるほ場を選ぶことが重要である。応性は通気性及び排水性などの物理性が良好であれば、特に土性を選ばない。

作型と品種

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	主な品種
半促成		△○△	□	◎	—	—	—	—	—	—	—	—	○	ミニキャロル(南部)
雨よけ		—	—	○△△	△	◎	◎	—	—	—	—	—	—	ミニキャロル(中・北部)
ハウス抑制		—	—	—	—	○△△	△	◎	◎	—	—	—	—	ミニキャロル(南部)

作り方

1.ほ場の準備

1) 土づくり

収穫終了時まで草勢を維持するためには、健全な根の伸長を促すための土づくりが極めて重要である。このため、深耕、排水対策、有機物の施用などによる土壌改良対策が重要である。土壌水分の目安は、土を手で握ると固まり、軽く押すと壊れる程度が適当である。

2) 施肥

生育初期から草勢がえ強くなり過ぎると受光体制が悪くなるので、緩効性肥料を施用する。また、土壌の物理性維持のため完熟堆肥を施用する。

3) 畦づくり

畦幅は200cm、ベツ幅は120cm、通路幅は80cmとする。高さは20cm前後を基準とする。

2.育苗管理

1) 育苗の準備

ミニトマトは大玉トマトに比べ耐暑性に優れ、高温による第一花房の着生節位の上昇や奇形花の発生は比較的少ない。しかし、30℃以上の高温では、根の張りが悪く地上も徒長ぎみとなる。そのため、育苗施設の上面の寒冷紗などで被覆して遮光するとともに、側面を開く換気に努める。

2) 苗床の準備

床土は10a当たり3・用意する。マサ土と完熟堆肥を容量比で1：1に混合し1・当たりチツソ、リンサン、カリ成分で各々100～200gを施用する。苦土石灰はpH6.5になるよう土壌診断によって施用する。通常は1・あたり1kg程度である。

3) 播種

種子は10a当たり50ml用意する。節木する場合は台木用の種子も同量用意する。播種床としては育苗箱15箱を用意し、床土を8cm厚さに入れる。条間10cm、種子間隔2cmで播種し、その上に5・程度覆土する。乾燥しないように新聞紙で覆い、発芽するまでは乾かない適宜かん水する。発芽したらすぐに新聞紙を取り除き、充分光線をあてる。

4) 移植

本葉2.5枚でポリ鉢に移植する。径12cmの黒ポリ鉢を10a当たり3,000個用意し、床土を入れて、移植2～3日前にはかん水しておく。鉢上げ後萎れる時は、葉水をかけ、トンネルの上から寒冷紗をかける。活着後は充分に光をあて、表面が白く乾いた状態でかん水する。

3.定植

1) 定植時期

本葉6～7枚、第1花房開花前の若苗を定植する。

2) 栽植時期

直立1本仕立てでは3.3・当たり8本、連続摘心仕立てでは6本以内とする。定植後株元に軽くかん水する。萎れる場合には葉水をかけてやり、高温期には寒冷紗でトンネルをする。

4.定植後の管理

1) かん水

活着まではやや多めにかん水し、活着後は根張りの促進のためやや控えめにする着果後はかん水量を増やし、果実の肥大と草勢維持に努める。

2) 温度管理

気温が上昇するにつれて換気を充分にする。5月下旬からはサイドビニールは開放する。

3) 追肥

化学肥料もしくは液肥をチツソ成分で10a当たり1回2kg程度、生育、収穫量に応じて行う。

5.病虫害防除

梅雨時期や秋の長雨の季節には疫病が発生しやすいので予防的に薬剤散布する。抑制栽培では育苗期から生育初期にかけて、アブラムシ類の被害が大きいので、育苗ハウス及び栽培ハウスの周囲には寒冷紗を張り侵入を防ぐ。病虫害防除基準は普通トマトに準じる。

収穫

ミニトマトの収穫は、果面全体が十分着色した完熟期に行う。収穫適期を過ぎると果面がしだいに黒ずみ始め、裂果の発生も増加するので、十分注意する。収穫は、早朝か夕方涼しくなって果実の温度が下がってから収穫する。